

ものしりともののけ

お化けよく知る、もの知り——日本語の体系的なつながり

白川静さんは『字統』や『字通』といった大部な漢字字書を一人で書いてしまった漢字学の大家で、「最後の碩学」と呼ばれました。「碩学」とは学問を広く深く知っている大学者の意味で、とても博識な「もの知り」の人のことです。

その白川静さんは『万葉集』などを研究する国文学者でもありました。ですから『字訓』という日本語の語源について考察した厚い字書も書いています。これから白川静さんの研究をもとにして、現代語の中に脈々と生き続ける日本語の体系的なつながりについて紹介したいと思います。

宮崎駿監督のアニメ映画『もののけ姫』を見た人も多いと思いますが、まずこの本の最初は「もののけ姫」の「もののけ」と白川静さんのような「もの知り」に共通する「も

の」という日本語について述べてみたいと思います。

この「もの」は精霊、霊的なものの意味です。つまり精霊の世界、お化けの世界をよく知っている者が「もの知り」です。

白川静さんの日本語の語源字書『字訓』によると、「もの」は、人が感知し認識できるもののもとより、感覚を超えて存在する超自然的なものをも含めて、物一般をさす言葉です。『字訓』の各項目には、その日本語を表す漢字が記されていますが、「もの」の項には

「物・者・鬼」が挙げてあります。つまり日本では「鬼」も「もの」で、精霊と考えられていました。「もの知り」とは、霊の世界のことをよく知る「鬼知」のことでした。現在の「もの知り」は、ひろく物事を知っている博識な学者らのことですが、昔は陰陽師おんみょうじのことなども意味しました。

『もののけ姫』の「もののけ」のほうは「物の怪」などとも書きますが、これは人にとり憑ついて悩まし、病気にしたり、死に



いたらせたりする死霊、生き霊、妖怪のことです。また、それらがとり憑いて祟ること
を言います。この「もの」も霊のことです。「け」は病気のことです。

このように「もの知り」「ものけ」「もの」が「霊」のことであるとわかると、目
から鱗が落ちるように、いっぺんに日本語のつながりが見えてきます。

「もの狂い」の「もの」も「霊」のこと。「霊」の力で正気でなくなってしまうこと、狂
気のことです。

死霊、生き霊は、お祭りなどの時には、さしさわりがありました。ですからそれらの
災いから免れるために一定の期間、食事や行動を忌みました。「忌む」とは避けて、身
を清め慎むことです。これを「ものいみ」と言います。「ものいみ」は飲食のことから、
言語、行為のことなど多岐にわたりました。沐浴や禊ぎなども行われました。

「もののふ」は朝廷に仕えるもろもろの集団の意味です。後に「武士」と書いて、戦士た
ちの意味となりました。この場合の「もの」は兵器のことですが、この「もの」も元々は
「霊」の意味で、「もののふ」は悪い邪霊を祓う集団のことでした。

古代の大豪族に、軍事・警察・裁判などをつかさどる物部氏がありました。『日本書
紀』の垂仁紀には物部十千根という大連が、雄略紀には物部目という大連が出てきます。
大連は大和政権の執政者です。物部氏は石上の神と関係が深い人たちでもありました。

天皇の親衛軍を率いた、この「ものべし」も、元々は精霊をつかさどり、邪悪な霊を祓
うのが職務の集団だったと思われれます。

もう一つ、「もの」という言葉が関係していて、私たちが日ごろ使うものに「物語」が
あります。前田富祺監修『日本語源大辞典』によりますと、動詞の「ものがたる」は中世
以降にみられる言葉なので、「ものがたり」を「ものがたる」の名詞形と考えるより、奈
良時代に成立していた「かたる」の名詞形「かたり」に「もの」を付けて、ある種の「語
り」を区別するために成立したと考えるべき言葉のようです。その「ものがたり」という
言葉が多く見られるのは平安時代になってからです。

さらに「もの」は「鬼」「霊」など霊力をもったものを言い、「もとは超現実の世界を語
るという意味であった」と『日本語源大辞典』は記しています。「物語」の「もの」も霊
やお化けに関係したものであったのです。

最後に漢字の「物」についても、少しだけ紹介しておきますと、これは「牛」の毛の色
についての文字です。「物」は雑色の牛のことで、古代中国では牛の毛の色、つまり「物
色」で吉凶を占ったと『字訓』に白川静さんは記しています。